

ケンペル『日本誌』にある「茶」の伝説

— 達磨と茶の関わり —

水 城 満里世
宮 崎 克 則

はじめに

17世紀末、オランダ東インド会社の医師として江戸時代の日本を訪れたドイツ人のケンペルは、著書『日本誌』の中で日本茶の栽培方法・製法・保存方法・効能・喫茶方法などを詳細に記述し、当時のヨーロッパに茶を紹介した。

『日本誌』は鎖国下にあった日本の状況を詳細かつ客観的に書いたもので、18世紀を通してヨーロッパにおける日本観を方向づけた。ケンペルは茶の伝播に関わる人物として“達磨”^{だるま}を紹介し、彼の挿絵を載せている。

その概要をしめすと、禅宗の開祖である達磨は眠らずに座禅を組み続けるといふ厳しい修行をしていたが、ついに疲れて眠ってしまったため、後悔して^{まふた}瞼を切りとって捨てた。瞼を捨てた所から茶の木が生えてきて、その葉を口にすると眠気が覚め、修行に専念できた。それ以後、茶は修行に励む僧侶たちの助けとなり中国、日本およびその他のアジア諸国に広まった、というものである。

達磨と茶の普及を結びつける伝説について、ケンペルは何を情報源としていたのか、これまでの研究では明らかになっていない。藤田琢司『日本にのこる達磨伝説』¹⁾はケンペルの記述を紹介し、

〔第1図〕 1712年『Amoenitatum Exoticarum』（『廻国奇観』）の達磨図



九州大学図書館所蔵（『日本誌』の挿絵も同じである）

この話はケンペルが日本滞在中に聞き及んだものと思われるが、日本で発生したものか、それとも中国に由来する話なのかはよくわからない。ケンペルはこの話を一体どこから仕入れたのであろうか。

という。他の研究においても同様であり²⁾、情報源は不明である。ケンペル『日本誌』は日本で集めた資料や見聞にもとづいて記述されているから、情報源は江戸時代に読まれていた説話集などにあるのでないか考えられるが、達磨と茶の伝播を結びつけるものはない。

江戸時代を通して日本と貿易ができたヨーロッパの国はオランダのみであり、その場所は長崎の出島に限られていた。ケンペルは役人らの厳しい管理のもと、「狭い牢獄」（ケンペルは『日本誌』の中で書いている）の出島で暮らしていたのであり、そのような状況の中で、ケンペルは茶と達磨の伝説を一体どのようにして知り得たのだろうか。

本稿の課題は、ケンペルが行なった日本研究はどのようなものだったのか、ケンペルはどこで何を見て聞いて茶と達磨を結びつけたのか、を明らかにすることにある。

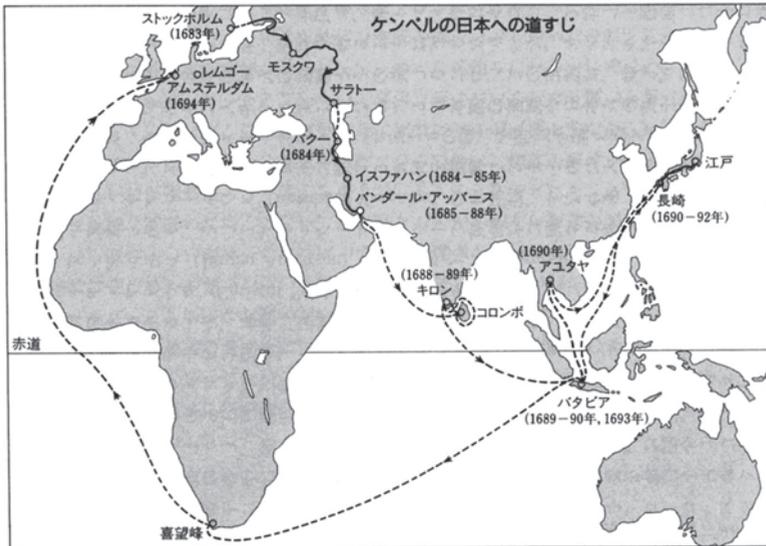
1. ケンペルと『日本誌』

ケンペルの経歴

ケンペルはどのような人物だったのか。まずはケンペルの生い立ちから日本に来るまでの経緯、また日本研究について概観する³⁾。

エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer) は1651年、ドイツのレムゴー (Lemgo) という町に生まれた。父は教会の主任牧師、曾祖父と祖父は代官職に就くなど、ケンペル家は社会的地位の高い知識人の家柄であった。ケンペルはレムゴーのラテン語学校に通い、16歳で故郷を離れ、ドイツ語圏内のいくつかの学校を転々としながら文献学・歴史学・地理学・哲学・古典文学などを学んだ。22歳の時にラテン語で書いた高等学校修了論文を提出し大学への入学資格を得ると、ポーランド国内に移り、当時ヨーロッパで知られていたトルン (Thorn) やクラカウ (Krakau) やケーニヒスベルク (Königsberg) などの大学で医学や自然科学を学んだ。

〔第2図〕 ケンペルの日本への道筋



ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルの見た日本』（NHK ブックス、1996年）

1681年、30歳の時にスウェーデンに渡り、スウェーデン国王がロシアとペルシャに派遣する使節団の秘書官となった。使節団は1683年3月にストックホルムを出発しモスクワで約2ヶ月間滞在した後、カスピ海を経て1684年3月にペルシャ王国の首都イスファハン (Isfahan) に辿り着いた。4ヶ月間行われたペルシャ王への拝謁の後、ケンペルはここで使節団秘書官の仕事を辞職し、オランダの東インド会社に就職し医師として旅を続けることを決意した。

1688年、インドや東南アジア貿易の商船が多く寄港するペルシャ湾に面したバンダル・アッバース (Bandar Abbas) 港を出航し、途中インドに寄港、1689年にオランダの東インド貿易の本拠地があったバタビア (インドネシアのジャカルタ) に到着した。そしてちょうどこの時、毎年交代していた長崎 (出島) のオランダ商館付きの医師のポストが空いたので、これに応募し日本へ来ることが決定したのである。1690年5月にバタビアを出航し、1ヶ月後にシヤム王国の首都アユタヤに到着、ここで約1ヶ月間滞在し、7月に日本に向けて出航、

1690(元禄3)年9月22日に長崎へ入港した。その後1692(元禄5)年10月に出島を出航するまでの2年間を日本で過ごしたのである。

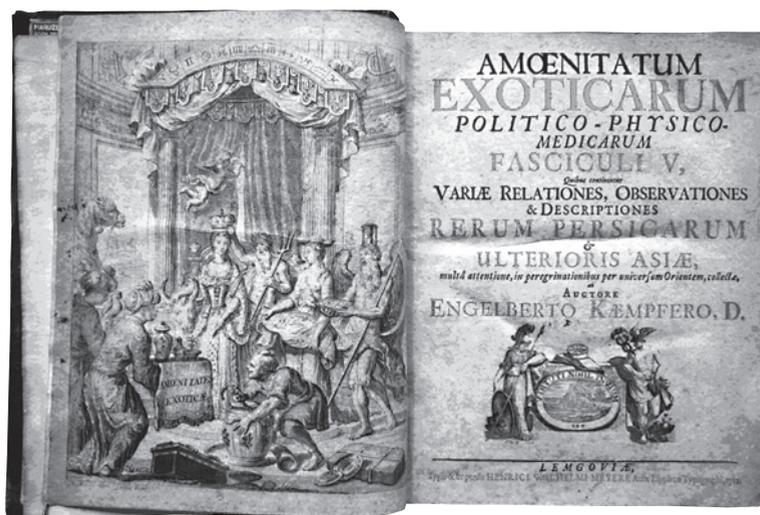
ケンペルは日本に滞在中、2度にわたって江戸参府を行っており、5代将軍の徳川綱吉に謁見している。当時、長崎のオランダ商館長は毎年、春に長崎から江戸まで出向き、将軍に拝謁することが義務付けられていた。この旅には随員として書記官と医師を伴うことができたのでケンペルは江戸へ行くことができたのである。この参府旅行は、狭い出島を出ることが許されなかった外国人であるケンペルにとって、日本と日本人を直接観察するのに格好の機会となった。この旅行中の記録は『日本誌』第5章に収められ当時の日本の様子をよく伝える内容となった(斉藤信訳『江戸参府旅行日記』〈平凡社東洋文庫、1979年〉で容易に読むことができる)。

ケンペルは日本を研究するためにさまざまな資料を収集した。和本や絵図などの出版物から、日用品や工芸品、植物標本に至るまで集めている。特にケンペルの仕事は医者であり、ヨーロッパでも日本でも医学は植物学と密接な関係にあったので、彼は熱心に植物研究を行なった。その研究意欲は日本人にも十分理解されていて協力を得ることができたので、日本に滞在中、最終的に420種類もの植物を収集して研究することができた。

『廻国奇観』と『日本誌』

ケンペルは帰国後の1712年に『*Amoenitatum Exoticarum*』⁴⁾(『廻国奇観』)という本をラテン語で出版した。これはケンペルのそれまでの長期にわたるアジア旅行における研究論文をまとめたもので、正式には『著者エンゲルベルト・ケンペル博士による世界東部旅行において注意深く集められたペルシャ及び遠方アジアについてのさまざまな報告、観察及び記述を含む政治的、自然科学的及び医学的 주제についての異国の珍しい記録、全五巻』という長たらしいタイトルがついている。これは長すぎるので、通常は最初の2文字をとって『*Amoenitatum Exoticarum*』と略される。内容を簡単にまとめると次の通りである⁵⁾。

〔第3図〕『Amoenitatum Exoticarum』の内表紙



九州大学図書館所蔵

第1巻…ペルシャ王の宮廷について

第2巻…ペルシャの諸事について（カスピ海の海水，バルセポリス遺跡など）

日本の製紙法，日本の鎖国について

第3巻…医学と治療法について，日本茶について，ペルシャとインドの麻薬について

第4巻…ペルシャ南部で栽培されるナツメヤシについて

第5巻…日本の植物について

このように、『廻国奇観』にはペルシャ関係の他に日本についての研究論文が含まれている。それは，日本の製紙法・鎖国・鍼療^{もぐさ}法と艾・茶・植物についてである。『廻国奇観』はおよそ1000ページにおよぶ長大なもので，しかも多数の図版を含むものであったため，多くの学者にとって高価なものであり，ベストセラーとはならなかった。しかしこれを出版したことにより，ケンペルが日本についての詳細な研究をしているということが，ヨーロッパの人々の知る

ところとなった。

ケンペルは『廻国奇観』の出版後、新たに本を出版することなく4年後の1716年に65歳で亡くなった。ただし彼は日本に関するまとまった本を出版しようと考えており、『日本誌』の原稿をドイツ語で書いていた。それがケンペルの生存中につき出版するに至らなかった理由としては、当時、本を出版するには莫大な費用がかかったこと、またドイツ語で書かれた原稿に興味を持ち、そのような本を買うのに必要な資金を持っている客は比較的少なかったことがあげられる。

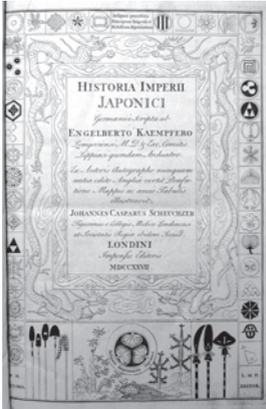
ところがケンペルの死後、ドイツ語の原稿に興味をしめす人物が現れた。イギリス人の博物学者・医者で、大英博物館の父であるハンス・スローン卿 (Sir Hans Sloane 1660~1753年) である。スローン卿はケンペルのドイツ語原稿や日本関係の遺品を、その所有者であったケンペルの甥ヨハンからほとんど全て買い取った。そして、自分の図書室の司書をしていたスイス人の医師、ヨハン・ガスパール・シヨイヒツァー (Johann Gaspar Scheuchzer 1702~1729年) に英訳を依頼したのである。シヨイヒツァーはドイツ語の『日本誌』原稿を英訳するとともに、すでに刊行されていた『廻国奇観』の日本関係論文もラテン語から英訳して附録として付け加え、1727年にロンドンで『The History of Japan』(『日本誌』)と題して出版した。

英語版『日本誌』は2年後にオランダ語やフランス語へ翻訳され、その後も版を重ねた。初版が出版されて10年の内に、再版と翻訳版をあわせて10種類が出版され、さらには50年後の1777年にレムゴーで新たに発見された2部の原稿をもとにドイツ語版が出版されてベストセラーとなった。こうして『日本誌』は、18世紀のヨーロッパ知識人たちの日本観を決定づけるものとなったのである。

18世紀の半ばから大量に編集された世界旅行記の全集や世界史の中の記述は、ケンペル『日本誌』を資料として取り上げているか、あるいはそれを書き直しているに過ぎない。例えば1753年にドイツで編集された『Allgemeine Historie der Reisen zu Wasser und zu Lande』(『海陸旅行史全集』)の第11巻は、ケンペル

〔第4図〕 ケンペル『日本誌』の内表紙

英語版 (1727年)



ウォルフガング・ミヒェル氏
所蔵

フランス語版 (1729年)



九州大学図書館所蔵

オランダ語版 (1729年)



九州大学図書館所蔵

『日本誌』を再編集している。また地図についても、ケンペルが持ち帰った地図をもとに独自に編集した日本地図が『日本誌』に掲載され、その地図がその後100年以上の長きにわたって定説となり、後にシーボルト（1796～1866年）が新しい資料を持ち帰るまで一般に通用していた。

『日本誌』は全5巻と附録からなる。その主な内容は次の通りである⁶⁾。

第1巻…バタビアからシャムを經由日本への旅行および日本の歴史・地理事情一般、シャムの歴史・地理を含む

第2巻…日本の政治事情

第3巻…宗教、衆派および聖哲の道

第4巻…長崎および外国人の対日貿易の歴史に関する一般的記述

第5巻…著者が2度にわたり長崎から江戸へ参府旅行した時の記述

附録…Ⅰ日本における製紙法について、Ⅱもっとも理由のある日本の鎖国、Ⅲ日本でよく行われている鍼術による疝気治療、Ⅳシナおよ

び日本でよく行われている艾灸，V日本の茶の話，VI龍涎香りゅうぜんこうについて

ケンペル『日本誌』以前にも当然ながらヨーロッパにおいて日本に関する本は出版されていて、ケンペルもそれらを読んでいた。しかしそれらは主にポルトガルやスペインのイエズス会の宣教師の報告によるものであった。彼らは自らの宣教活動に対するヨーロッパの金銭的あるいは精神的な援助を仰ぐため、日本のことを非常に肯定的に、あるいは誇張して書いており、それは日本を“客観的に”紹介したものではなかった。これに対しケンペルは、ヨーロッパの肯定的な日本観を保ちつつ、それに初めて科学的な調査研究を加え、客観的に分析している。ケンペル『日本誌』はヨーロッパ人に当時の日本をもっとも正しく紹介した最初の本であった。18世紀後半、フランス啓蒙主義の最大の著作『百科全書』の編集者であったデニス・ディドロ (Denis Diderot, 1713~1784年) は、日本関係の記事を多くケンペルから引用し、日本の哲学についての論文でケンペルに大きな賛辞を送っている⁷⁾。

ケンペル収集の和本と日本人の助手

ケンペルは2年間の滞在中に日本の和本や地図、さらに昆虫や貝類などの動物標本、押し花による植物標本などを多数収集し、それらをヨーロッパに持ち帰っている。『日本誌』の挿絵はそれらの資料をもとに銅板に彫られ印刷された。カニの挿絵については、ケンペルは江戸時代に刊行された啓蒙書の百科事典である『訓蒙図彙きんもうずい』をもとに描いていることが容易に理解できる。

〔第4図〕は、『訓蒙図彙』のカニ図 (『訓蒙図彙』は朱子学者の中村惕斎が寛文6 (1666)年に著した我が国初の図解辞典である⁸⁾)

〔第5図〕は、大英図書館に残るケンペル自筆のスケッチ⁹⁾

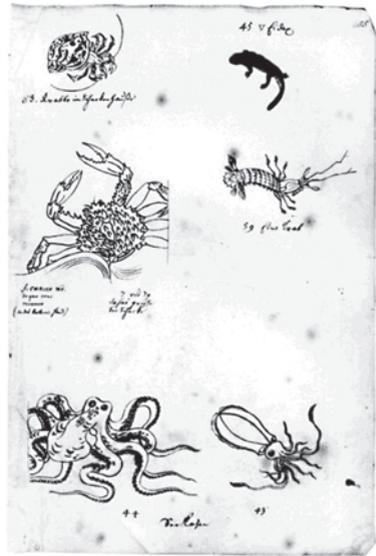
〔第6図〕は、『日本誌』第1巻魚介類の中のカニの挿絵

〔第4図〕中村惕斎『訓蒙図彙』



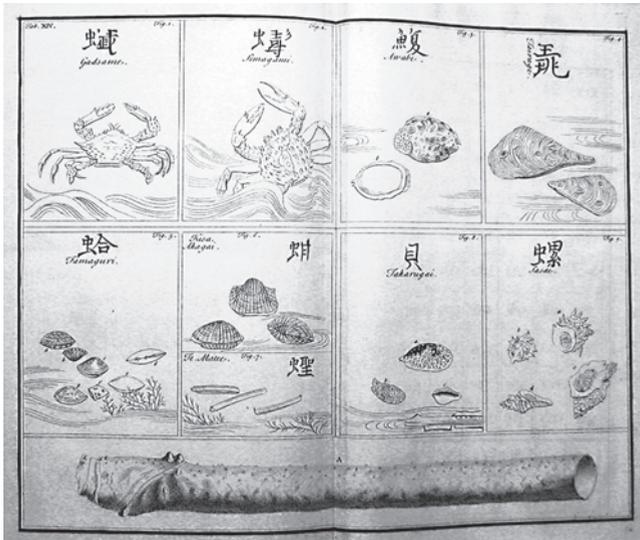
九州大学図書館所蔵

〔第5図〕ケンペル自筆スケッチ



大英図書館所蔵

〔第6図〕『日本誌』の挿絵 カニなど



ウォルフガング・ミヒエル氏所蔵

ケンペルのコレクションは、現在ロンドンの4カ所に分散している。すなわち、大英博物館の日本部とその人類学博物館、そして英国自然史博物館と大英図書館である。昆虫や貝類などの動物標本、植物標本の多くは傷んだり行方不明になったりしたが、和本類はほぼ完全な形で大英図書館に保管されている。それは、これまで確認されたところでは、刊本33点・54冊、地図10点、古文書7点などである¹⁰⁾。

ケンペルが集めた和本は、書誌学的に貴重なものはあまりない。つまり古版本とか古活字版というようなものはない。それはケンペルの収集品が、日常的な実用のための小型サイズのものであったからである。彼が集めたのは、ポケット版の旅行ガイドブック、百科事典、習字の手本、武家の人名録、歴史年表、暦、小説や和歌などの文学書などであった。その目録はシーボルトやアーネスト・サトウなどのコレクションも含めて川瀬一馬他編『大英図書館所蔵 和漢書総目録』（講談社、1996）にあるので、ケンペルが集めた和本類のいくつかの表題と刊期をしめすと、

【旅行案内】『江戸道中記』（貞享3年）、『西国海陸安見絵図』（貞享頃）、『今様道中付』（元禄3年）、『道中鑑』（元禄4年）、『道中回文絵図』（延宝頃）、『西国三十三所順礼ゑん記』（延宝8年）

【百科事典】『訓蒙図彙』（寛文6年）、『図解本草』（貞享2年）

【手習い本】『七いろは』（貞享5年）、『画引千字文』（貞享3年）、『増益伊呂波雑韻』（貞享2年）

【日常生活】『家内重宝記』（元禄2年）、『大ざっしょ』（延宝8年）、『貞享元禄伊勢暦』（貞享5年～元禄4年）

【武鑑・法度】『太平武鑑大全』（元禄2年）、『壬辰江戸鑑』（元禄4年）、『御成敗式目』（万治2年）

【年代記】『掌中年代記』（貞享1年）、『倭漢年表録』（貞享4年）、『大日本王代記』（貞享1年）

【文学・軍記】『頭書伊勢』（元禄以前）、『大坂物語并首帳』（寛文11年）、『島原合

戦記』(明暦・万治頃),『百人一首』(延宝1年)

【絵図】『大日本図鑑』(寛文頃),『本朝図鑑綱目』(貞享4年),『日本国大絵図』
(元禄以前)

などである。ケンペルが集めたのは、当時一般的に流布し販売されていた和本を中心としていたことがわかる。そして刊期をみると、おおよそ延宝以後すなわち1673年以後、ケンペルが日本を離れる元禄5(1692)年までの30年間にしぼられる。ケンペル収集の和本は、現在ではきわめて珍しく、現存する唯一のものもある。現在の日本ではほとんど見つからず、稀に見つかっても保存状態はよくない。これと対照的に、ケンペル収集の和本は保存状態もよく、オリジナルの題箋がついたままになっているものも少なくない。またこれらの多くには、ケンペルによる極細字の書入れがある。彼が『日本誌』を書くために、どれだけそれらの本を活用したかがわかる。

しかし、ここで一つの疑問が生じる。鎖国が厳しく行われていた時代に、出島で囚人のような暮らしを続け、江戸参府の際も役人たちから厳しく監視されていたはずのケンペルが、わずか2年間でこれらの資料を収集し、かつ研究することができたのはなぜだろうか。ケンペル自身が、その答えを『日本誌』の序文で次のように記している¹¹⁾。

(中略)私は当初から、これら上層の日本人達に私の職分である薬物学を以って接し、また彼らの希望に応じて天文学や数学をも教え、無報酬で快く奉仕してやろうと心に誓っていた。そしてこの授業に際しては、彼らが好んで嗜むヨーロッパのリキュール酒を特別サービスとして彼らに振舞った。これが図に当たり、彼らの心を動かし、私は全く自由自在に、すこぶる精確に日本の動植物や宗教や俗事について、また私の知りたいと思うことについて、何でも教えてもらえるようになった。誰もが造詣を傾けて話をしてくれるようになり、私とたった二人きりの時には、極秘の話までこっそりと教えてくれるようになった。

ケンペルは毎日出島に出入りするオランダ通詞や役人たちと親しくなり彼らから多くの情報を得ていたというのである。そしてさらに、一人の有能な日本人青年の存在を明らかにしている。ケンペルによれば、その青年は24歳くらいの知識欲に燃えた学生で、日本や中国の文籍に精通していた。ケンペルが出島に来てまもなく従僕として雇われ、ケンペルから西洋医学を学んだ。この青年はケンペルの指導の下に、出島の管理者である吉川儀部右衛門の持病を治療している。そのため儀部右衛門はケンペルとこの青年に好意を持ち、ケンペルの滞在中常にこの青年を助手として手元に置くことを許し、さらに江戸参府の際に2回とも随行させている。

ケンペルはこの青年に熱心にオランダ語を教えた。その結果、青年はわずか1年で他の通詞が足元にも及ばぬほど読み書きが上達し、そのおかげでケンペルは日本の地理・政治・制度・宗教・歴史・家庭生活・動植物などについて豊富な知識を得ることができた。青年はケンペルのために日本の書籍を購入したり、他人から借りたり、またそれらを翻訳してケンペルに提供した。青年の働きに対してケンペルは「かれはこの仕事を実に好意的にやってくれた(中略)。かれがそのために外出した時には私は必ずながしかの銀子を与え、また身に危険のふりかかるような骨折りをした場合には特別の報酬を与えてその労を犒うことを忘れなかった」と記し、ケンペルの日本研究におけるこの青年の貢献を高く評価している。

『日本誌』序文には、この青年について名前や出自などの詳しい情報は書かれていないのでその正体は謎であった。しかし、1990年のケンペル来日300年を記念してケンペル資料の全面的な再調査が行われた際に、新たに発見された古文書によってその身元が明らかにされた。それは元禄5(1692)年「請状之事」で、長崎の本古川町の町人伊良子弥次郎が、同じ町に住むオランダ通詞今村市右衛門の息子源右衛門がケンペルの部屋の小使いとして雇われるときに書いた保証書の写しであり、ケンペルコレクションとして大英図書館に残っている。この今村源右衛門は、後にオランダ通詞として高名となった今村市兵衛(名は英生、1671~1736年)のことで、日本の蘭学史に大きな足跡を残した人物で

あることがわかっている¹²⁾。

以上に述べたように、ケンペルの日本研究を可能にし、『日本誌』という大著を書き上げることができたのは、今村源右衛門という有能な日本人の助手と、彼によってもたらされた日本の和本類などの資料によるものであった。

2. ケンペルが書いた日本茶とその伝来

ケンペルは日本の茶に非常に注目していた。それは当時、茶が貿易商品として重要だったからである。17世紀初頭、日本茶はすでにオランダ東インド会社によってヨーロッパにもたらされ、上流階級の間で愛好されていた。当時のヨーロッパ人にとって日本の茶といえば「茶の湯」つまり抹茶を茶筌で泡立てて飲むという独特の方法がイメージされた。ケンペルが『廻国奇観』で紹介し、『日本誌』の附録としても掲載された「日本の茶の話」とはどのような内容だろうか（『日本誌』の挿絵はショイヒツァーによって描き直されたので、『廻国奇観』の茶樹の挿絵と異なっている）。

全体の主な内容は、茶の名称の由来・茶木の生態・栽培方法・茶摘みの時期・製茶法・出来上がった茶の種別・保存用の茶壺・喫茶法・茶の効能・茶道具についてである。そして〔第7図〕の茶樹と〔第1図〕の達磨の挿絵が載せられている。

まず茶の木の栽培は、種子の蒔きつけから始まる。ケンペルは「日本人は特別な茶園や茶畑を作らず、単に畑の縁を利用する」という。当時、農民は自家用の茶をつくる時、畑の周りや山の斜面を利用して茶の木を植えていた。ケンペルが江戸参府の折に、畑の周りや山の斜面に植えられた茶の木を見ていたことは旅行日記の記述からもうかがえる。茶摘みの時期は、およそ3回に分けられる。第1回の茶摘みは2月の終りか3月の初めに行なわれる。芽を出して2～3日の、よく開ききれてない極上の若葉が摘まれる。第2回目は3月の終りか4月の初めに行なわれる。この時期の葉は、すでに開いているものもあれば、まだ開ききらないものもある。第3回目の茶摘みは4月の終りか5月の初

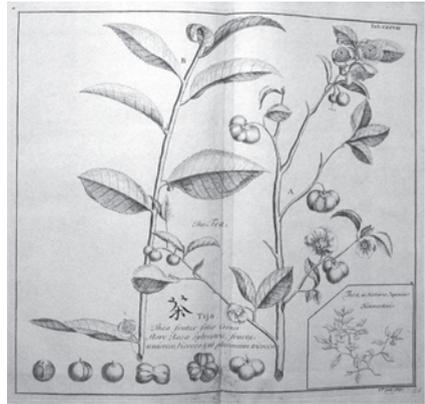
〔第7図〕『廻国奇観』と『日本誌』の茶樹

『廻国奇観』



九州大学図書館所蔵

『日本誌』



ウォルフガング・ミヒエル氏所蔵

めに行なわれる。茶の木の葉がもっとも茂っている時期でもっとも採集量の多い茶摘みである。

製茶法は、釜炒り製法と呼ばれる製法がある。摘みたての茶の葉を鉄釜で炒り、炒った茶葉をまだ熱いうちにゴザの上に広げ、茶葉が冷えるまで手で揉み捻る。茶葉が完全に乾燥するまでこの作業を数回繰り返す。

茶の種類と喫茶法についてケンペルは大きく3つに分類した。一つ目は、碾ひき茶すなわち抹茶である。これは最も軟らかい新芽の葉から作られ、最も高価で貴重で上等な茶である。茶の葉を細かく挽いて粉にし、それに湯を加え泡立てて客にすすめ、客はそれを啜り飲むという方法で、いわゆる「茶の湯」である。将軍をはじめ全国の大名や富裕階級の間ではこの方法で飲まれる。二つ目は、唐茶と呼ばれる茶である。これは一つ目の茶よりもっと育った葉から作る。

中国式の製法で作られ、中国式の喫茶法すなわち茶葉に熱湯を注ぎ、茶の成分が湯に滲み出たらその上澄みを飲むという飲み方をするのでその名で呼ばれる。この茶は質や価値によって幾段階にも分けて売られ、一般大衆が常用しているのはこの種の茶である。この飲み方は中国からすでにヨーロッパに伝わっていたという。そして三つ目は番茶である。これは最後の茶摘みで摘み取られた、硬くて唐茶にならないような葉を粗く揉んで作る。茶葉を水か湯に投入し煮出してその上澄みを飲む方法である。番茶は茶の最下級品で、もっぱら一般庶民の喫茶法である、という。

そして茶の木の生態に関して、非常に細部まで観察している。例えば、花が咲いた後の実について「通常3個の種子がくっついて生り、果皮は初め緑色で熟すにつれて黒くなる。中には真赤な核があり、榛（はしばみ）の実のように硬くて脂気がある」、[少し嘗めただけで唾液の分泌が強くなり、やがて一時的な吐気を催す]と記している。また、茶の効能には「便通をよくする、血液を浄化する、痛風を予防する、体内の結石を溶かす」とあり、日本で茶をよく飲む人の中に、これらの病気に苦しむ人を1人も見なかった、という。

本稿で注目したいのは、ケンペルが茶の始まりとして、茶が広く飲まれるようになったきっかけは達磨にあるという伝説を紹介していることである。これは重要な箇所であるため、ほぼ全文を引用する¹³⁾。

（前略）茶という字を見ていると、有名な高僧達磨の眼瞼を思い出す。茶と達磨の眼瞼とはまるで異なった概念であるが、それが偶然一致するのは、茶を飲み始めた時期に前後して達磨が生存していたことと深い関係がある。少し脇道へ外れるが、この辺の事情を簡単に述べることは、読者にとって迷惑ではないだろう。

達磨は、インドの香至王の第3子として生れ、西暦紀元前1025年に生れた東アジアの代表的宗教、仏教の開祖釈迦の伝燈を継いだ第25祖であり、非常に信仰の厚い高僧である。かれは西暦519年にシナに渡り、シナ人に仏教を伝え、かれの言葉を籍りて言えば、衆生済度の宗教を弘布すること

に専念した。最後には、かれは単に教理を説くだけではなく、身を以て修行の範を示し、常時野天に生活し、難行苦行、煩惱を断ち、この方法で正覚聞法の域に達しようと信じた。

かれは木の葉を食べ、毎晩眠らずに悟の行、すなわち至高のものを見つめる修行を続けることによって、完全至高の聖なるものを求めたのであった。倦まず^う撓まず^{たわ}、つねに肉体に鞭打ち、一身を御仏に捧げることが、かれにとって懺悔^{ざんげ}の生活、人間完成への道を辿り続ける最高の継走であったのである。

多年に亘って眠らぬ修行を続けた揚句、長い間の断食で、心身ともに疲労困憊の極に達し、かれはついに深い睡魔に襲われた。しかし目覚めた途端に、かれは誓いを破ったことに対し、心から懺悔しないではいられない心境になり、将来このようなことがまたとないようにしようというひたむきの欲求に駆られて、過ちのもとになる両眼の瞼を切りとり、腹立たしげにこれを捨て去ってしまった。後日かれが悔を残した場所へ立ち戻ったところ、切りとった瞼の眼に映ったのは、そこに灌木が生えているという奇蹟であった。この灌木が、他ならぬ茶の木であったのである。

この茶の木は、それまではこの世にはなかったか、あるいは少なくともその頃までは、その特性については何も知られていなかった。達磨はその葉を試食し（かれが生のまま食べたか、湯で煮出して飲んだかは伝わっていない）、ただちに、この茶の葉に珍しい活力素があり、断えず解脱成道への修行を続ける新しい力とともに、法悦が湧き上って来るのを覚えたのであった。かれは、これまで知られていなかった茶の葉の効用や、茶の葉をどのようにして飲用するかを、大勢の弟子に伝え切れなかったが、この貴重な植物の噂は、まもなく広く巷間に伝わり、比類ない茶の葉の利用が普及した。この灌木を表示する本来の文字がないので、人々はこの木を達磨の眼瞼を髣髴させる文字で茶と表示しているのである。仏教徒が崇拜して措く能わざるこの有名な人物が、芦の葉に乗って海を渡り、川を越えている画像を、附図に挿入して読者にお目にかける。茶の名称の話は、これで十分であろう。

ケンベルが、この伝説を茶の記述の冒頭部分で記したのは、よほど印象に残った話だったのだろう。伝説の情報源を探る前に、茶の始まりと普及について先行研究をもとにまとめておこう。

中国における茶の普及

茶はもともと中国の西南地域、特に雲南省辺りの山地が原産地とされている。植物学的特性から見ると、温帯から亜熱帯の地域で、年間を通して雨が降り、無霜地帯であることが茶の自生の条件となる。雲南省の各地には現在でも野生の大茶樹が点在している¹⁴⁾。

雲南省の北に位置する四川省には、茶に関する古い記述が残っており、中国茶業の発祥地であろうといわれている。四川省の省都・成都から南方約50kmのところに彭山県という地域があり、漢代には武陽と呼ばれていたところである。中国の前漢時代（紀元前202年－紀元後8年）、日本では縄文末期にあたる時代に、王褒という人が当時の奴隷のことを記録した『僮約』という書籍を書いている。その中の一節に「武陽で茶を買う」また「茶を煮る」という記述がある。ただしここで書かれている文字は「茶」と「茶^と」の2通りあり、「茶^と」は「苦菜^{にがな}」のことであって茶ではないとする理解もあるため、現在の茶と同様のものかはわからない。

晋代になると、茶のことを表す記述がはっきりと文献に見られる。東晋の永和11(355)年に常璩という人が、巴・蜀・漢中（現在の四川省、雲南省辺り）の地誌である『華陽国志』を編纂している。その第1巻「巴志」には次のように記されている¹⁵⁾。

桑蚕麻紵魚塩銅鉄丹漆茶蜜靈龜巨犀山鷄白雉黄潤鮮粉，皆納貢之

【要約】〔この地では〕桑・蚕・麻・紵・魚・塩・銅・鉄・丹・漆・茶・蜜・靈龜・巨犀・山鷄・白雉・黄潤・鮮粉などが採取され、それらは全て貢物として〔中央政府に〕納め入れられた。

「巴」は現在の四川省東部の重慶市から東方、湖北省に至る地域にあたり、当時の巴の国であったところである。上記に見える通り、この地域に茶の産出があったことは間違いなからう。

茶に関する総合的な本が最初に出たのは唐代のことである。日本では奈良時代、遣唐使を派遣していた頃である。その本は760年頃に陸羽という人が著わした『茶経』である。陸羽は、湖北省の省都・武漢から西方200キロにある天門市の生まれといわれている¹⁶⁾。756年頃に起きた安祿山の乱から避難するため、長江を下り、江南の地、湖州（浙江省湖州市）に移って『茶経』を書いた。この『茶経』には茶の起源・製茶の道具・茶の製造・茶器・茶の煮立て方・茶の飲み方・茶の歴史・茶の産地などが書いてある。茶の産地によると、唐代の中国では長江を軸とする地域に幅広く茶業地が分布していることが認められ、西南地域に発した茶は長い年月の間に長江沿いに下流域へと伝播していたことになった。唐代にはすでに中国茶業の基礎は出来上がっていて、喫茶の風習は広く普及していたことがわかる。『茶経』によると、唐代の製茶法は「採り、蒸し、擣き、拍ち、焙し、穿ち、封ず」とある¹⁷⁾。茶摘みした葉を蒸し、白に入れてつき、型に入れて固形にし、焙炉で乾燥し、穴をあけて竹や楮の皮で作った刺しにさし、竹で編んだ容器に貯蔵しておくというもので、餅茶（固形茶）と呼ばれる。

唐代から宋代ごろまでは、蒸した茶の葉についてそれを固形にして乾燥する「蒸し製法」による固形茶が主流であったが、宋代の終りごろになると、固形にするのを止めて、蒸した茶の葉をそのまま乾燥させる散茶法に変わった。

その後、元代から明代になると、蒸し製法そのものがなくなり、代わりに茶の葉を釜で炒る「釜炒り製法」が主流となった。これは長江以南の温暖な地方各地に茶の産地ができ、貴重品であった茶も庶民の口にまで入るようになってきて、そこで、もっと簡単に作れる方法として、どこの家庭にもある日常の料理をつくる時の釜で茶の葉を炒って乾かす方法である釜炒り製法が、自然発生的に庶民生活の中から生まれてきたのではないかと考えられている。

日本への茶の伝来

日本に茶が伝来した時期については諸説あるが、日本で茶が飲まれたことをしめす確実な史料は、9世紀初め、平安時代の初期にさかのぼる。792年から833年に至る勅撰の日本の正史である『日本後記』¹⁸⁾の第24巻、嵯峨天皇（在位809-823年）の弘仁6（815）年4月22日の条に、日本における茶の最古の記録がある。

（嵯峨天皇）幸近江国滋賀韓崎便過崇福寺。（中略）大僧都永忠手自煎茶奉御。

これを書き下すと「（嵯峨天皇は）近江国滋賀韓崎^{からさき}¹⁹⁾に幸し、便ち崇福寺を過ぐ。（中略）大僧都永忠は手自ら茶を煎じて奉御す」となる。すなわち「嵯峨天皇が滋賀の韓崎に行った時、崇福寺の僧である永忠が自ら茶を煎じて差し上げた」という記録である。この永忠とは在唐30年に及ぶ留学僧で、806年に遣唐船で帰国した人物である。平安初期、永忠をはじめ中国へ渡った留学僧らによって茶はもたらされた。そして天皇や貴族、高僧たちの間でいわゆる“唐風趣味”の一端として飲まれていたようである。そのため茶を飲むことが“習慣”として生活の中に浸透するには及ばなかった。その後894年に遣唐使の派遣が廃止されるとともに、茶は次第に人々から注目されなくなっていく。

日本において茶がふたたび注目を集め、一般に普及するようになったのは鎌倉時代初期のことである。それもやはり留学僧であった栄西（1141~1215年）が宋代の中国より茶の種を持ち帰り植えたことに始まる。栄西は臨済宗の開祖として知られている。彼は1168年、当時の新しい仏教を学ぼうと宋に渡り、当時の中国における禅の流行を知って帰国する。そして1187年に2度目の入宋を果たし、天童寺²⁰⁾で臨済禅を学び、1191年、茶とともに持ち帰って日本に広めた。最初に茶を植えた場所についてはいくつか説があるが、一般には福岡県と佐賀県の県境に位置する脊振山であるといわれている。さらに栄西は1211年に日本で最初の茶書である『喫茶養生記』を著した。その冒頭に「茶というものは末世における養生の仙薬であり、人の寿命を延ばす妙薬である」とある。不老長

寿を願う者ならば誰でも欲しくなるような効能を書いている。1214年、鎌倉幕府の第3代将軍源実朝が酒害に悩んでいたので、実朝に『喫茶養生記』を献上し実朝は感悦した。これが喫茶を普及させるきっかけとなり、鎌倉時代から室町時代にかけて武士や豪商の間に広がっていった。

日本で庶民の間に茶が普及するのは江戸時代になってからである。江戸時代の農業手引書、元禄10（1697）年の宮崎安貞『農業全書』²¹⁾には、

凡そ都鄙，市中，田家，山中ともに少しも園地となる所あらば，必ず多少によらず茶を種ゆべし。左なくして，妄りに茶に錢を費すは愚なる事なり。一度うゑ置きては幾年をへても枯れ失する物にあらず。富める人は慰ともなり，貧者は財を助くる事多し。

とあり、「園地」（空き地）に茶を植えることを奨励している。江戸時代の製茶法には蒸し茶法と釜炒り茶法の2つがあった。『農業全書』によると、蒸し茶法は、摘み取った茶葉をすぐに蒸気で蒸すか、熱湯に短時間浸ける。そして焙炉という乾燥器で乾燥させるか、ゴザの上で手もみした後に天日で乾かすかの方法であった。釜炒り茶法は、茶葉を専用の釜で万遍なくかき回し熱くなったら取り出してゴザの上に広げて手でもみ、冷めるとまた釜に戻してかき混ぜた。この作業を7～8回またはそれ以上繰り返して水分を完全に取り去った。〔第8図〕は江戸時代の製茶の様子を描いた「刈茶製法場」の図である。

〔第8図〕「刈茶製法場」の図
大蔵永常『広益国産考』



3. 達磨伝説とケンペルの情報源

日本に伝わる達磨伝説

ケンペルは茶の始まりについて、達磨が修行中に臉を切り捨てたところから茶の木が生えたと記している。この達磨に関する伝説は、ケンペルが日本に来た江戸時代の元禄頃（1690年代）に一般に知られていたのだろうか。

まず達磨の生涯について先行研究をもとにまとめる²²⁾。中国における達磨の伝記は、『洛陽伽藍記』『二入四行論序』『続高僧伝』などに断片的に見えるものに始まり、『楞伽師資記』『伝法宝記』『歴代法宝記』などで展開し、『宝林伝』『祖堂集』では骨格が固まり、宋代の『景德伝灯録』『伝法正宗記』で完成する。

『景德伝灯録』によると、達磨の生没年は未詳であるが5世紀末から6世紀初頭の人物で、南天竺（南インド）の香至国の国王の第3王子として生れた。もとの名を「菩提多羅」といった。ある日、香至国にインドの高僧・般若多羅が訪ねてきた。般若多羅は釈迦の伝統を受け継いだ第27代目にあたる祖師として尊崇されていた。般若多羅は南天竺をめぐり歩いて教えを広め、多くの人を導いたので、香至王から非常に高価な宝珠を与えられた。そこで般若多羅は試みに、香至王の3人の王子に質問した。「この世の中に、この宝珠より優れた宝があるか」。長男と次男は「この宝珠は最高の宝で、これに優るものはない」と答えた。ところが3男の菩提多羅だけは「この宝珠は世間的な宝にすぎず、世の光を借りて輝いているだけである。この世の中で最高のものは、智慧すなわちお釈迦様の説かれた真理である」と言った。般若多羅は菩提多羅こそ仏法を授けるのにふさわしい人物であると悟った。

菩提多羅は般若多羅のもとで出家し、名を「菩提達磨」と改めた。菩提達磨は般若多羅の教えに従い、しばらく南天竺で教えを広めた後、6世紀の初め頃に震旦（中国）へと布教の旅に出た。3年の船旅を経て、達磨は中国の広州（広東省）の港に着いた。当時の中国は南北朝時代、南朝梁の君主は崇仏天子として知られる武帝であった。武帝は達磨を金陵（南京）に迎え入れ、2人は問答

を行なった。「朕は即位以来、寺を建て経を写し、数多くの僧を得度させた。いかほどの功德があるか」と武帝が問うと、達磨は「功德はない（無功德）」とあっさり答えた。「なにゆえ功德がないと言うのか」と武帝が尋ねると、達磨は「それらは人間界や天上界に生まれる程度のちっぽけな功德にすぎず、結局は迷いの原因になる。たとえて言えば、物にできる影のようなもので、存在するようには見えるが、実体はない」と答えた。武帝はさらに「では真の功德とは何か」と尋ねた。達磨は「円かで、空寂を本質とする淨らかな智である。それらの功德は世間的な営みで得られるものではない」と答えた。最後に武帝は「朕の目の前にいる者は、一体何者なのか」と訪ねた。達磨は「識りません」と言った。武帝は結局、達磨の語を理解することはなかった。いまだ機縁の熟していないことを悟った達磨は、都から立ち去った。

梁を去った達磨は、一茎の芦の葉に乗って揚子江を渡り、魏の洛陽に向かった。そして嵩山少林寺に入り、洞窟の岩壁に向かって9年間、座禅を組んで修行をした。人々は達磨を壁観婆羅門と呼んだ。当時、北魏王朝は仏教を崇敬し、あまたの優れた僧侶がいたが、中には達磨にいつも論議をもちかける者もあり、しばしば大騒ぎになることがあった。彼らは達磨を殺そうと毒薬を盛り、達磨は甘んじてそれを受け、端然と座したまま遷化した。その年のうちに熊耳山に葬られ、定林寺に塔が建てられた。

達磨が遷化してから3年、宋雲という人物が北魏の帝の命で使者として西域に赴いた。使命を果たして帰国の途中、葱嶺（パミール高原）で、片方の履のみを携えて独り歩む達磨に出会った。宋雲は「どこに行かれる」と問いかけた。すると「天竺に帰るのだ」と答え、さらに「あなたの主君はすでに崩御された」と宋雲に告げた。宋雲が北魏に帰ると確かに皇帝は亡くなっており、事の次第を新帝に伝えた。そこで帝が定林寺の達磨の棺を開かせると、中は空っぽで、ただ片方の履のみが残されていた。

以上の達磨の伝説は日本へ伝わった。そして長い年月の間に改変や追加を繰り返しながらも、達磨伝説はさまざまな書物に記された。その中の一つに『今

昔物語集』がある。『今昔物語集』は日本を代表する説話集である。成立時期は平安時代後期の1120年ごろと考えられている。全31巻からなり、巻1から巻5までが天竺（インド）部、巻6から巻10までが震旦（中国）部、巻11から巻31までが本朝（日本）部という構成である。達磨に関する説話は、巻4・天竺部の第9話「天竺の陀楼摩和尚、所々を行きて僧の行ないを見たる語」、巻6・震旦部の第3話「震旦の梁の武帝の時、達磨渡れる語」に見られる。『今昔物語集』は、当時人々に語り継がれていた口承の話を書き留めたばかりではなく、先行するさまざまな書物からも説話を集めて編集されたものであるが、この巻4・第9話はすべて中国の宋代にできた『心性罪福因縁集』巻上の第2話「囲碁を打つ二老僧」・第3話「懈怠の比丘を呵す」・第4話「心に随って行を為す」の3つの説話を翻案して、一話にまとめたものと考えられている。また巻6・第3話は上記の『景德伝灯録』にある達磨と武帝の間答と隻履帰天の説話を一話にまとめたものである。

このように、『今昔物語集』に書かれた達磨伝説は、中国の書物に見られる達磨の伝記がほとんど形を変えずそのまま記されているにすぎず、しかもそこには達磨と茶に関する伝説はない。巻4・第9話の“達磨が囲碁を打つ二老僧に出会った”という説話などは、『今昔物語集』のほかに『宝物集』巻6、『宇治拾遺物語』巻12など、他の説話集にも記されており、平安末期から鎌倉時代にかけて、かなり流布した有名な説話であったことが知られているが、ケンペルが記した“達磨が臉を切って捨てた所から茶の木が生えた”という説話は含まれていない。

それでは、栄西らによって日本に禅宗と茶が本格的にもたらされ、広まり始めた鎌倉時代以降はどうであろうか。鎌倉時代末期の1322年に臨済宗東福寺派の僧、虎関師錬が著した『元亨釈書』という仏教史書がある。全体としては、伝（僧侶の伝記）・資治表（仏教伝来から鎌倉時代までの年表）・志（仏教文化史）という構成である。伝の先頭に「南天竺菩提達磨」がある。ここでは、達磨が遷化した後、日本に渡来して聖徳太子と出会ったという話になっている。推古天皇21(613)年に大和国の片岡に赴いた聖徳太子は一人の飢人に出会う。太子は飲

食を施し、自ら衣を脱いで与えた。しかし飢人は死んでしまったので、太子は墓をつくり葬った。数日後、墓穴を開くと、太子が与えた衣が棺の上に畳んで置いてあるだけで、ほかには何もなかった。飢人は実は達磨であった、という伝説である。

禅僧によって日本へ茶がもたらされたことを考えれば、達磨と茶の関係をしめす説話があってもよさそうだが、そのような伝説を見つけないことできない。

『仏神霊像図彙』の達磨図

ケンペルがやってきた江戸時代の中頃にどのような達磨伝説が語られていたか、『仏神霊像図彙』をもとに検討しよう。ケンペルが来日した年の元禄3(1690)年に出版された『仏神霊像図彙』(土佐秀信画)は、それまで一般に刊行されることなく各寺院の奥深く所蔵されるにすぎなかった図像集や経典などをもとにまとめられた本で、いわば一般向けの仏像図鑑である。編纂にあたって引用された教典図書は『阿含経』『方等経』にはじまり、『年代記』にいたるまで全86冊に及ぶ。約300体の仏像図と仏具が描かれており、〔第9図〕に見るように内容は図と簡単な解説からなっている²³⁾。

〔第10図〕は『仏神霊像図彙』巻4にある達磨図であり、禅宗六祖の1人として掲載されている。六祖は達磨を初祖とし、その門人の2代目慧可、3代目僧璨、4代目道信、5代目弘忍、6代目慧能の6人のことで、中国で禅宗を広め基礎を築いた人たちである。『仏神霊像図彙』の達磨に関する解説を要約すると次の通りである。

禅宗の初祖、菩提達磨尊者は南天竺の香至王の第3子である。本名は菩提多羅という。般若多羅より法を受けついで後、梁の普通元年に支那に来た。また嵩山少林寺で9年間壁に向かって座禅した。梁の大通2年12月28日に亡くなり、洛陽にある熊耳山に葬られた。その3年後、魏の宋雲という人が西域で達磨に出会った。宋雲がどこに行くのかと尋ねると、達磨は西方の天竺に帰るのだと言い、去って行った。日本には推古21年来て、片岡で遷化した。今その地を達磨墳と呼ぶ。

〔第9図〕『仏神靈像図彙』の仏像図



(オランダ) ライデン大学図書館所蔵

〔第10図〕『仏神靈像図彙』巻4の達磨図



これは中国の『景德伝灯録』などや『今昔物語集』に見られる説話とほぼ同じ内容であり、ここにも茶に関することは書かれていない。江戸時代にも達磨といえはこのような伝説が一般的に知られていたことが確認できる。また『仏神霊像図彙』の達磨図は、達磨が一本の芦の葉の上に乗っている「芦葉達磨図」である。これは達磨が梁の武帝と意見を異にして都を去ったあと、揚子江を芦の葉に乗って渡ったという伝説に基づいて描かれた達磨図である。このように達磨伝説を題材とした達磨図は、禅宗の僧たちによって、禅の修行のために、あるいは民衆に禅の教えを説くために描かれた。それらの達磨図は、大きく3種類に分けることができ、「芦葉達磨図」・「面壁達磨図」・「隻履達磨図」がある²⁴⁾。「面壁達磨図」…長江を渡った達磨はやがて高山の少林寺に至り、そこで面壁9年の行に入る。「面壁達磨図」はその時の達磨を描いたもので、岩上に座し、壁面ににらむ達磨の姿となっている。「隻履^{せきり}達磨図」…達磨入滅後3年、魏の国使宋雲は西域からの帰国の際に、パミールあたりで片方のクツだけをもって西へ向かう達磨に会った。不思議に思った宋雲が、帰国後、達磨の墓を開くと遺体はなく、片方のクツだけが残されていた。「隻履達磨図」は、宋雲がパミールで出会った達磨を描いたもの。

ケンベルが「日本の茶の話」の中に挿入した達磨図（〔第1図〕）は、『仏神霊像図彙』の中の達磨図と同じく「芦葉達磨図」であり、〔第1図〕と『仏神霊像図彙』の〔第10図〕を比べてみると、芦の葉の向きが逆になっているが、全体の構図としては同じである。『日本誌』の挿絵は、ケンベルが当時一般に流布していた百科事典や実用書などを収集し、それらを参考に挿絵を描いていたのは、『訓蒙図彙』をもとに描かれたカニ図を例にあげた。カニ図に比べれば、達磨図は一致しているとはいえないが、似ているということ是可以する。『仏神霊像図彙』はケンベルの滞在期間中である元禄3（1690）年から元禄5（1692）年の間に刊行された本であるため、ケンベルは入手可能であった。ただし『仏神霊像図彙』は、ケンベルコレクションを保管する大英図書館に残っておらず、ケンベルが所持していたという確証はないが、彼は『仏神霊像図彙』などをもとに達磨図を描いたのではないかと考えられる。

東南アジアに伝わる達磨伝説

達磨の図については、『仏神靈像図彙』などをもとにしたとしても、そこに茶に関する伝説は書かれていない。ただし「達磨が脛を切った」という話そのものは、江戸時代の古浄瑠璃の「だるまの御本地」に見える。古浄瑠璃とは、三味線を伴奏とする語り物であって、近松門左衛門や竹本義太夫によって芸術的に完成させられる以前の浄瑠璃をさす。この「だるまの御本地」は万治年間（1658～1661年）のものと言われている。『古浄瑠璃正本集』によると次のように書かれている²⁵⁾。

それよりも、少林寺の山に入り、坐禅石を求め出だし、9年の座禅なさに、げに人間は昼夜の境あり。眠き心の出でければ、心は澄まして居給へども、まぶたの覆い重なれば、切って捨てんと申し召し、まぶたを切って捨て給ふ。これを9年面壁と申すとかや。心の内こそ殊勝なれ。

これによって、達磨が修行中に眠気を覚ますために脛を切り捨てた、ということが江戸時代に一般に知られていたことはわかるが、脛を切り捨てたところから茶の木が生えた、ということは語られていない。

ケンペルは、いつ、どこで、達磨と茶を結びつけたのだろうか。ケンペルが訪れた国は日本だけではない。ベルシャ・インド・バタビア・シャムを經由して日本に来て、帰国の際にふたたびバタビアに寄っている。日本以外の場所で達磨と茶の伝説を見聞したのではないかと推測できる。ケンペルが就職したオランダの東インド会社は、ジャワ島のバタビアを拠点に、日本やインド、東南アジアの各地で貿易を行っていた。そこで、東南アジア地域に達磨と茶に関する伝説が残っていないかを、世界各国に残る神話や伝説を集めた松村武雄編『世界神話伝説大系』²⁶⁾に見てみよう。その第15巻はインドネシア、ベトナムの神話伝説を収録しており、その中に「茶」の伝説がある。全文を引用する。

インド族長の達摩大師は険しい山を越え、深い河や急流を渡り、長い間、放浪の旅を続けていた。寒暑、飢餓、疲労にも打ち勝っていた。獅子も豹も彼の前には、羊のようにおとなしくなり、何でもいうことを聞いた。鱈さ^{ひょう}えも、神聖な大師がお通りになるのを見れば、感動して泣いた。

大師はガンジス河の岸辺をお通りになって、中国に入り、時のミンチ王に拝謁することになった。ミンチ王はかねて予言を受けていたので、7年間、大師が来るのを待っていた。それで王は大師を非常に歓待した。大師は王に幾多の予言を与え、仏陀の到来を宣言した。そして、各々の魂が待ち望んでいる未来の涅槃^{ねはん}の喜びと平和を得られることを褒め讃えた。大師はなおも、仏教徒の知らなければならぬ四大真理とすべての正しい途を、例を挙げて説明した。実に大師の生活は、祈祷と修業と学問と冥想に費やされていた。

毎朝、夜が明けると、大師は修業に出掛けた。寄る年波で腰が曲がっているのに、杖を手にして山や谷に分け入った。そして人々に、よき訪れを伝え、苦しんでいる人々を救った。しかし、足が弱くなって震えるようになったので、少しずつ旅をすることにした。

天帝の子孫であるミンチ王は、インドの聖典を中国語に翻訳するように大師に命じた。大師は仰せに従い、日々禁欲生活を続けて仕事に励んだ。毎日、聖典の原本を読誦して、神秘的な文字を転写した。それは、骨の折れる仕事であったが、彼はなかなかへこたれなかった。

黄昏時になると、少し休み、また夜の瞑想を始めた。即ち、心を静かにして、姿勢を正し、手を互いに組み、脛を結び、魂の眼を見開くのであった。その時は、鳥の鳴声も野獣の吠える声も、雨風の音も、雷の音も、彼の崇高な気分を妨げるものはなかった。

そのうち、ひもじくなり、また疲れを覚えてきたが、よく辛抱した。そして全く肉体の誘惑に打ち勝った。しかし体の疲れで眠くなり耐えられなくなった。それで、魂の恍惚状態になったところで、少しまどろんだ。

目覚めて見ると、太陽は高く中空に昇って輝いていて、彼の弱さをな

じっているように思われた。鳥は愉快そうに鳴いていたが、彼は何だか、自分になじられているように考えられた。それで、彼は我と我が身を責めて、自分の弱さを憐れんで下さい、と天に祈った。

彼は天の赦しを得るため、前よりいっそう熱心に祈るよう、また肉体の苦しみを増すようにした。なお、その日は、特に聖典の翻訳に専心した。彼の心はますます冴えてきて、この仕事はほとんど完成するかと思われた。

暗い夜には、不幸にして、邪魔されて出来なかった昨日の瞑想を、再び続けた。しかしまたも彼は深い眠りに落ちるようになった。目覚めた彼は非常に悲しみ嘆いた。この呪われた眠りをなくすにはどうしたらよいだろう？長い修業で疲れても目覚めているにはどうすればよいだろう？

と、思案している時、突然彼の蒼白の唇ににこやかな笑いが浮かんだ。彼はある方法を発見したのである。天の加護を信じ、勇気を出してやりさえすれば、ほんの造作もないことであった。即ち、脛を切断して、地に投げ棄てることである。

そこで天帝は彼の勇気に同情して、それに報いてやろうとなさった。不思議や、彼の脛は、地に落ちると、種となり、根が生えた。そして、血に染まっていた種は一夜のうちに、芽が生えて立派な樹木となった。

やがて瞑想が終わり、彼が脛を捨てた場所を通り、裂けた眼で下を見ると、脛はなくなって、その代り、彼の脛の肉、彼の血潮から生れた、彼の強い魂から生れた美しい樹木が見出された。それは、房をした、茎のある、美しい、白く香のある花をもった植物であった。それがお茶の樹の始まりである。

彼は輝いた茶の葉を食べたら、いつまでも眠くないようになった。彼の肉体は強くなり、魂は奇妙に冴えてきた。

やがて達磨は多くの名声および恩恵を遺して死んだが、死ぬ前に、お茶の木が日当たりのよい南の傾斜地に大きく成長して、ますます繁殖しているのを眺めることができた。

この伝説はケンペルが書いた、達磨が臉を切り捨てたところから茶の木が生えた、という内容と同じものである。日本に残る達磨に関する伝説からは見つけることができなかつた茶の始まりをしめす達磨伝説が、東南アジアに伝わっている。ただし、その伝説がいつ頃成立したのかは不明である。

おわりに

ケンペルが書いた「日本の茶の話」について、達磨図については元禄期に刊行された仏像図鑑である『仏神霊像図彙』などを参考にしたのであらうと考えられること。また、達磨が修行中に眠気を覚ますために臉を切り捨て、そこから茶の木が生えて茶が広まったとする伝説については、日本にあった達磨に関する伝説でなく、恐らく東南アジアに伝わっていた伝説を東インド会社の拠点であるバタビア滞在中に知り得たのではないかと考えられること。以上が本稿の結論である。

ケンペルは、日本の茶について記述するとき、日本の本にあった達磨図と東南アジアで聞いた達磨伝説を結びつけて、禅宗とともに日本に茶が普及したことを伝えたかったのだろうか。

〔註〕

- 1) 藤田琢司『日本にのこる達磨伝説』（禅文化研究所、2007年）。
- 2) B・M・ボダルト＝ベイリー『ケンペル礼節の国に来たりて』（ミネルヴァ書房、2009年）においても、同様に達磨と茶の伝説を紹介し、「ケンペルは日本で一つの珍しい話を耳にした」とだけ記し、日本で「珍しい話」を聞いたのだらうと推測しているに過ぎない。宮崎克則、福岡アーカイブ研究会編『ケンペルやシーボルトたちが見た九州、そしてニッポン』（海鳥社、2009年）においても同様である。
- 3) ケンペルの生涯については、ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』（NHKブックス、1996年）、及びB・M・ボダルト＝ベイリー『ケンペル―礼節の国に来たりて―』（ミネルヴァ書房、2009年）にまとめられている。
- 4) 九州大学図書館所蔵、またPDFがGoogle Booksにて閲覧可能。
- 5) B・M・ボダルト＝ベイリー『ケンペル 礼節の国に来たりて』（242～256頁）をもとにまとめた。

- 6) 今井正訳『日本誌』（霞ヶ関出版、1973年）を参考にまとめた。
- 7) ボダルト＝ベイリー『ケンペル 礼節の国に来たりて』263頁。
- 8) 大英図書館所蔵、ウォルフガング・ミヒェル『ENGERLBERT KAEMPFER Heutiges Japan』（2001年）。
- 9) 小林洋次郎編『江戸のイラスト辞典 訓蒙図彙』（勉誠出版、2012年）。
- 10) ユーイン・ブラウン『『日本誌』と英国に伝わるケンペル遺産』（ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』所収）。
- 11) 今井正訳『日本誌』（上巻、75頁）より引用。
- 12) 片桐一男「ケンペルと今村源右衛門英生」（ヨーゼフ・クライナー編『ケンペルのみた日本』所収）、国立民族学博物館編展示図録『ケンペル展』（157頁、1991年）。
- 13) 今井正訳『日本誌』（下巻、505頁）より引用。
- 14) 松下智『ティーロード 日本茶の来た道』（雄山閣出版、1993年）が詳しい。
- 15) 中林史郎『華陽国志』45頁（明德出版社、1995年）。
- 16) 出生は不明、捨て子ともいわれる。天門市の竜蓋寺で育てられた。
- 17) 林左馬衛、安居香山『茶経』63頁（明德出版社、1974年）。
- 18) 六国史の一つ。藤原緒嗣らの編により840年成立。守屋毅『喫茶の文明史』（淡交社、1992年）、村井康彦『茶の文化史』（岩波書店、2011年）。
- 19) 現在の滋賀県大津市唐崎。琵琶湖の西岸に位置する。
- 20) 中国浙江省寧波市郊外にある。
- 21) 土屋喬雄校訂『農業全書』248頁（岩波書店、1936年）。
- 22) 中尾良信『日本禅宗の伝説と歴史』（吉川弘文館、2005年）、藤田琢司『日本にのこる達磨伝説』（禅文化研究所、2007年）、中村浩訳『達磨からだるまものしり大辞典』（社会評論社、2011年）。
- 23) 伊藤武美『復刻佛神靈像圖彙仏たちの系譜』（同時代社、1987年）。
- 24) 榊原悟「達磨の図像学」（『群馬県立女子大学紀要』19号、1998年）。3種類の達磨図は以下で確認できる。
 - 「芦葉達磨図」（知恩院）<http://www.monjudo-chionji.jp/27.html>
 - 「面壁達磨図」（齊年寺）<http://www.kyohaku.go.jp/jp/tenji/chinretsu/setu/setu.html>
 - 「隻履達磨図」（豊橋市美術博物館）<http://www.toyohaku.gr.jp/bihaku/frame-rosetu-daruma.htm>
- 25) 横山重校訂『古浄瑠璃正本集 第五』（角川書店、1966年）。
- 26) 松村武雄編『世界神話伝説大系』第15巻－インドネシア・ベトナムの神話伝説－（名著普及会、1979年）。